

序

なぜ学術論文を書くのか。論文を書く意義はどこにあるのか。

このたび、『政治学研究』67号に論文を寄稿された執筆者の方々は、その意味と意義を強く深く認識されていることであろう。

学術論文を執筆する際、多くの困難に直面する。その困難は、それぞれの専門分野によって大きく異なるが、人文社会科学系において共通するのは次の二点である。

第一は、自らの文章力、表現力の乏しさに起因する。頭のなかには、こんなに大きな構想がある。しかし文章で表現すると、うまくその学問的な面白さを伝えることができない。自分の部屋のなかで、素敵な飛行機を作ったのはよいが、部屋の窓が小さすぎて、外に飛び出すことができない、という状態である。

そしてもう一つ、より重要なのは、先行研究との関係である。資料を精緻に読み込み、データを分析し、自分は新しい学説に辿り着いたと思った。ところがよく調べると、同じことは既に、他の研究者によって、何年も、何十年も前に指摘されていた。あるいは自分では壮大な理論を構築できたと（一瞬）考えたが、様々な先行研究に触れるなかで、「このような見方もある」「こんな解釈もある」と知り、壮大であったはずの構想は急速にしぼんでいく。

しかし、そこではじめて私たちは気がつく。先人たちが積み上げてきた学問の蓄積が、いかに豊饒で、偉大なものであるかということに。だから私たちは、そうした先人たちの学問的営為に最大限の敬意を払い、先行研究と真摯に向き合い、格闘しなければならない。それゆえに、学術論文においては、厳密に「註」を付けることが、何よりも優先される。盗作や剽窃など、もってのほかである。

ii 政治学研究67号 (2022)

大学に所属するプロフェッショナルな学者を含め、およそ学術論文の執筆とは、これまで先人たちが築いてきたエベレストのように大きな山の上に、真珠ほどの小さな石を一つ、積み上げる営みに過ぎない。

だが、それこそが学問の本質であり、醍醐味である。それは古代ギリシャにおいても、平安時代の日本においても、変わりはない。そして、この学問の地道な蓄積こそが、人類の進歩を支えてきた。いつか人類が積み重ねてきた学問の山は、月にも太陽にも届くであろう。

鮮やかに輝く、色とりどりの宝石のような珠玉の論文、16本が収載された『政治学研究』67号の公刊を、心よりお慶び申し上げます。

2022年4月

法学部教授・政治学科学習指導
大久保健晴